

それでもあなたは提供しますか？

カイリーは45個を提供し
今も脳梗塞の
後遺症に苦しんでいる

アレクサンドラは
28個の卵子を提供し
卵巣を失った

シンディは60個の
卵子を摘出されたあと出血し
生死の境をさまよった…

卵子提供 美談の裏側

米国・代理母の実態を描く衝撃のドキュメンタリー！

原題 Breeders : A Subclass of Women ?

代理出産

繁殖階級の女？

A FILM BY THE CENTER FOR BIOETHICS AND CULTURE



「代理母は人間ではなく 孵化器と見なされています」ゲイル

参加費無料

要事前申込

一般参加可

ZOOMによる開催 各回17時30分開会

解説 代理出産を問い直す会・代表 柳原良江（東京電機大学 准教授）

11月26日（金）「卵子提供—美談の裏側」
12月10日（金）「代理出産—繁殖階級の女？」

第13回 大原社研 シネマ・フォーラム オンライン連続上映会

申込期限 11月24日[水]（学外の方は先着 200名まで）

<https://forms.gle/SRjWcPdWVwMITSF76>

申し込んだ方のみに、上映前日 13:00 頃 Zoom のURLをお知らせします。



第1回：「卵子提供—美談の裏側」上映

2021年11月26日（金）17:30～19:20（45分間の上映と解説・質疑応答）

第2回：「代理出産—繁殖階級の女？」上映

2021年12月10日（金）17:30～19:50（50分間の上映と解説・質疑応答）

主催・問い合わせ先：法政大学大原社会問題研究所

〒194-0298 東京都町田市相原町 4342 ☎ 042-783-2305 E-mail: oharains@adm.hosei.ac.jp

作品紹介:「卵子提供—美談の裏側」

原題「Eggsploitation」, 2013 年, 45 分
(米国 The Center for Bioethics and Culture Network 制作)

今やアメリカの不妊治療は数千億円規模の巨大ビジネスに成長している。そこでもっとも盛んに取引されている商品とは何だろう?——人間の卵子である。大学構内の掲示板やソーシャルメディア、オンラインの求人広告では、世界中の若い女性たちが数十万円から数百万円、時には一千万円もの額を提示する広告に勧誘されている。誰かの夢を叶えるために「人助けをしましょう」と、甘い言葉で誘われるのだ。

これらの求人広告はもちろん、映画やテレビドラマまでもが卵子提供に好意的だ。卵子提供は、女性たちの助け合い、自己犠牲、科学技術の華麗なる成果として描かれる。しかしそこに卵子提供の実態は表れていない。彼女たちが提供を決めた経緯はもちろん、どのように薬を服用し、手術を受けているのか、そして提供後に彼女たちがどうなっているのかは、美辞麗句の裏に隠されたままだ。

本作品の原題は「Eggsploitation」。「Eggs」(卵子)と「Exploitation」(収奪)をつなげた造語である。当事者へのインタビューを通じて、実際の卵子提供者の扱われ方、提供者が経験する短期的・長期的リスクといった、今まで知られていなかった実態が明らかにされる。そこからは、若い女性たちを資源とみなし収穫しつつける姿、すなわち卵子提供の常套句である「人助け」とは対極の収奪システムが浮かび上がってくる。

日本の卵子提供と代理出産の現状

1991 年、日本初の代理出産斡旋事務所が開設されて以降、代理出産は、日本人が外国人女性を利用する形で普及した。そのマーケットは米国からはじまり、次第に発展途上国の貧困女性を用いる「生殖アウトソーシング」へと拡大していった。

2000 年から 2014 年の間には、長野県のクリニックで、家族間の無償代理出産が行われていたこともある。しかしそれらは家族間トラブルや健康上の理由から休止に至っており、現時点で日本人が行っている代理出産は、その全てが海外の女性に金銭を支払い子を産んでもらう「商業代理出産」である。

依頼者は、不妊の異性カップルのみならず、独身男性、独身女性、男性カップルと多様である。その一方、近年では、日本人女性が裕福な中国人の代理母になった事例も報告されており、日本人と代理出産の関係は、あらたな局面に入りつつある。

卵子提供も、代理出産と同じく 1990 年代から普及し始めた。それに伴い、若い日本人女性が卵子を売る事例が生じている。彼女らは主にインターネット上で業者の募集に応じ、米国や東南アジアに渡航、現地のクリニックで採卵手術を受ける。こうした“渡航卵子ドナー”を「副業」として紹介するサイトもあり、そこでは「50 万円～80 万円もの収入」と宣伝される。

2020 年 12 月の臨時国会で「生殖補助医療法」が成立した。これにより一般社会で卵子提供は、法的・社会的に容認されたものと見做されつつある。他方、無償ドナーが殆ど集まらない現状で、人々は、相変わらず斡旋業者を通じて卵子を購入する必要があり、卵子提供の商業化が進む恐れがある。さらに同法は、代理出産の合法化も視野に入れており、近いうちに代理出産容認に向けた議論が行われるかもしれない。(柳原良江)

作品紹介:「代理出産—繁殖階級の女?」

原題「Breeders: A Subclass of Women?」, 2014 年, 50 分
(米国 The Center for Bioethics and Culture Network 制作)

代理出産は、21 世紀の大きな問題の一つになりつつある。有名人か一般人かを問わず、代理出産を利用して家庭を築くことが多くなっている。しかしこの方法は、女性、子ども、家族にとって複雑な問題をはらんでいる。

代理母となる女性や代理出産で産まれる子どもたちに、どんな影響が生じるのか。金銭のやりとりはどのように物事を複雑にするのか。家族や親しい友人のために行われる自己犠牲的な代理出産に問題はないのか。代理出産は愛にみちた美しい行為なのか、それともただ妊娠をサービスに貶め、赤ちゃんを商品に貶めているだけなのか。いったいこの方法はどのように捉えられるべきなのだろう。私たちは代理出産とうまく折り合うことができるのか。いや、そもそも私たちが代理出産と折り合う方法を模索する理由はあるのだろうか。

本映画は、これまで比較的問題がないとされてきた「ボランティア」、女性による「人助け」と言われる代理出産に焦点をあて、代理母やその周囲の人びとの語りを通じて、この方法が当事者のあいだにもたらす影響を描き出すものである。

制作者について

二つの映画を制作した The Center for Bioethics and Culture Network (生命倫理文化ネットワークセンター) は米国の NPO 団体で、生命倫理に関する社会問題を対象に、ウェブサイトを通じた情報発信をはじめ、ドキュメンタリー映画制作や、講演、メディアにおけるインタビュー出演などを行っている。米国内の生殖技術に関する法律制定にかかわる公聴会に出席するほか、国連でも発言し、国際的に生殖技術政策への政治的発言力を高めつつある。

今回の二つの作品の他に、クローン人間作製を中心に幹細胞研究に関する倫理問題を扱う「Lines That Divide」(2009 年)を手がけたり、匿名で提供された精子により生まれた人の問題を描く「Anonymous Father's Day」(2011 年)を制作してきた。

日本語版製作:代理出産を問い直す会

「代理出産を問い直す会」(代表:柳原良江)は 2008 年に若手研究者 3 名により設立され、代理出産を中心に、第三者の関わる生殖技術がもたらす倫理的問題の研究を行ってきた。この方法は一般的に医学・科学技術的側面から語られがちだが、本会では特に見過ごされがちな生命や人の意味・価値、あるいは搾取や収奪など人文社会的な側面に焦点を当てている。

学術的な研究活動に加え、代理出産をはじめ「第三者の関わる生殖技術」に関する重要な社会問題が起きた時はコメントを発表している。また近年では、世界的な代理出産反対キャンペーン「STOP SURROGACY NOW」による声明の日本語訳「今こそ STOP! 代理出産」を制作している。

主催・問い合わせ先: 法政大学大原社会問題研究所

〒194-0298 東京都町田市相原町 4342

☎ 042-783-2305 E-mail: oharains@adm.hosei.ac.jp